

說

苑

企業及企業者の概念に就て

室 谷 賢 治 郎

—

現代の所謂資本主義的經濟組織の下にあつて、各種の生産要素を結合し、所得分配の泉源を形成するものは企業である。即ち企業は現代經濟組織の樞軸を爲すものであつて、凡ゆる經濟活動は畢竟之に據つて回轉するのである。米國學者 Thorstein Veblen が其の『企業論』の劈頭に『現代文明の物質上の骨組は産業組織であつて、此の骨組を動かす指導力は企業である。』と喝破したのは

洵に當を得た觀察である。されば經濟組織乃至社會組織の現在將來に對し、苟も批判を加へ改造を圖らんとする者は、須く先づ企業の研究に指を染むべきである。

(1) Thorstein Veblen, *The Theory of Business Enterprise*. New York, 1904. p. 1.

然るに從來企業に關する理論的研究は、寡聞を以てすればあまり多く發表せられなかつた。其の理由は種々擧げ得るであらうが、一つには從來の經濟學の *Schematizierung* が頗る不適當であつた點に歸せしめ得ると思ふ。蓋し從來多くの經濟學者の教ふる所を見るに、斯學攻究の分野は生産・交換・分配・消費の四篇に分たれ、就中生産篇の關する所は所謂生産の三要素としての土地・資本・勞働の技術的方面に限られた。而して企業活動の重要な所以が認知せられ、生産篇中に企業が新なる要素として附加へられるに至つても、それは概ね生産篇の末尾に附せられ且つ他の二要素と同一平面に置かれるものであつた。『經濟學は囚はれたり』と呼んだのは故大西教授であるが、余は此の言葉を移して以て經濟學に於ける企業論の傳統的取扱ひ方に援用せしめても妨げあるまいと信ずる。凡そ企業は土地・資本・勞働の如く經濟活動の基礎條件として一定不易の性質を有するものである。凡そ企業は土地・資本・勞働の如く經濟活動の基礎條件として一定不易の性質を有するものである。加へ、土地・資本・勞働の三者は企業の手結びつけられるによつて始めて其の意味を有し得るものである。

から、企業と右の三者とを同一の平面に列べて觀察を下すのは決して適當なる處置と謂ひ得ぬ。此のことは福田博士も夙に指摘せられた所であつて、博士の言を藉りて言へば『今日現在の經濟生活活動のアルファにしてヲメガたるものは獨り企業』である。故に經濟生活活動の解剖は、先づ企業理論の正しき理解より始めねばならぬこととなるのである。然らば企業論は經濟學の範圍内にあつて如何なる地位を占むべきかと言ふに、當に生産篇の劈頭に來るべきものと余は信ずるのである。

(2) 福田博士『經濟學全集』第一集七〇八頁。

茲に最近に於て企業論を生産篇の劈頭に立て、此の立場よりして土地・資本・勞働の説明を下したる經濟書を手にし得たとは余の大いに愉快に思ふ所である。ブラーグ大學教授たりし Dr. Alfred Amonn の „Grundzüge der Volkswohlfstandslehre.“ Erster Teil. Der Prozess der Wohlfstandsbildung (Die Volkswirtschaft): Deskriptive und theoretische Volkswirtschaftslehre. Jena, 1926. が即ち是れである。今 Amonn の此の書の結構に就て一言せんに、彼は先づ序論として經濟學の對象と任務とを明かにし⁽³⁾、次に第一篇を國富の建設及び分配の過程と題して之を次の四章に分つ。

第一章 國民經濟の構造と系列。

第二章 個人主義的交易過程。

第三章 社會經濟の動態。

第四章 新國民經濟學の發達と方法論。

而して右の第一章は從來の生産篇に、第二章は交換篇・分配篇を合したるもの或は流通篇に略該當するものであつて、第三・第四の兩章は斯學研究の最新傾向を指示するものと見ることが出来る。然らば吾等當面の問題たる企業論は、Amonn の第一章に於て如何なる取扱を受けて居るかと言ふに、彼は茲に國民經濟の概觀を與へたる後直ちに經營と企業に移り、經營の種類、企業の形態、經營集中と企業合同を論じ、然る後生産手段に論及し、其の種類として土地・資本・勞働を説くといふ順序である。企業論の經濟學に於ける重要が Amonn の如き明敏達識の學者によつて認識せられたことは、極めて注目すべきことに屬する。

(3) Amonn の著は特に Volkswohlslandslehre といふ。アダム・スミス以下今日に至るまで多くの學者によつて説かれ來つた所謂 Price economics とは撰を異にし、近時 Pigou 等によつて唱へられる Welfare economics と相通するものである。以て經濟學最近の思潮の趨く所を悟るべきであらう。

さて企業の理論的研究に於て、最初に解明すべき問題は企業の本質如何といふことである。本稿は此の問題を取扱ひ、兼ねて何人が企業者なりやに論及するを以て目的とする。

企業の本質を考慮するに當つては先づ少くとも學者の所説を聽くことから始めねばならぬ。

碩學 Schmoller は企業を定義して曰く、『個人・家族若しくは團體が習慣及び法律に依つて定められた或る永續的の形式に従つて商品又は勞働を規則正しく市場に供給することを企て、其の賣買より生ずる利益を以て生計を營み、少くとも收支相償はしめんことを目的として勞力及び資本を投じ且つ使用する時は之を企業といふ』と⁽¹⁾。

(1) Schmoller, Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre. I. 1908. S. 454.

増地商學士譯『企業論』改譯第一—二頁。

今 Schmoller の此の定義を吟味するに、之は坂西氏も言はれる如く、『其の措辭婉曲精細を極む』⁽²⁾るも、未だ明確に企業の本質を捕へたものとは思考せられぬ。何となれば Schmoller の特徴とも見るべき經濟現象を説明するに際し、常に社會現象・政治現象を以てせんとする歴史的・歸納的態度が、企業の説明の場合にも冗長に失し、其の眞意の果して奈邊に存するかを捉へ難くするからである。唯だ此の定義の中にあつて、云はゞ千金の重さを有すと考へられるのは、『或る永續的の形式に

従つて』なる一句である。蓋し此の一句は、企業の持續的組織なることを示すものであつて、之を看過するときは、企業も投機も概念上同一系列に屬すと見られ、後者は前者の極限概念として立てられるに至るのである⁽³⁾。併しながら投機は嚴密に言へば、市價の變動を豫期して其の差額を利する目的を以てする賣買取引、即ち Dealings in difference であつて、割合に暫定的なるを特色とする⁽⁴⁾。企業の持續的なると同日に論ずべからざるは謂ふまでもない。

(2) 坂西由藏著『企業論』第三十六頁。

(3) 津田武二稿『企業に於ける危險負擔の數理的解説』（國民經濟雜誌第三十六卷第六號）參照。

(4) 佐野博士著『取引所投機論』第二頁參照。

次に Sombart によれば、『企業とは貨幣價值に見積もられたる給付と反對給付との契約の締結を基として財産を充用し、財産所有者に利潤を生ぜしむることを目的とする經濟形態を云ふ。』⁽⁵⁾

(5) Sombart, Der moderne Kapitalismus. Bd. I. 1 A. 1902. S. 195.

此の定義は坂西氏の認めて以て『比較的克く企業の性質を説明したり』⁽⁶⁾とせられたものであるから、後に一括して論評することとし、先に坂西氏の下す定義を見やう。坂西氏に従へば、『企業とは市場の利潤を贏得することを目的として經濟行爲を主導する所の經濟的組織を云ふ。』⁽⁷⁾即ち氏の見

る所によれば、企業の觀念を構成するに主要なる事實は次の二つである。

第一、企業は秩序的・持續的の組織形態として獨立の存在を有すること。

第二、企業の目的は市場の利潤を贏得せんとするに在ること⁽⁸⁾。

(6) 坂西氏、前掲書、第三十八頁。

(7) 同上、第四十二頁。

(8) 同上、第三十九頁—四十頁。

之に由つて考ふるに、Sombart 並びに坂西氏は、何れも企業の本質を利潤獲得の裡に求めんとするものゝ如くである。此の説は聊か觀察の方面を限局して考ふるときは、亦一種の見解たるを失はぬであらうが、併し企業の本質を説いたものとしては楯の半面を見て未だ他の半面を見ぬとの評を下さざるを得ぬやうに余には思へる。蓋し企業は其の語源の示す如く⁽⁹⁾、『引受ける』、『敢て爲す』、『背負つて立つ』の義であつて、『利潤を獲得する』といふ意味は毫も含まれて居らぬ。即ち企業の本質は危険を負擔する點に存し、利潤獲得は此の危険負擔の對償に外ならずと解釋すべきものと思ふ。坂西氏は、企業の觀念は其の根柢に伏在する所の心理的基礎によつて定めねばならぬ、唯だ其の結果として外面に現はるゝ所の危険負擔の一事實を捕へて是が定義を盡さんとするが如きは徒に

其の枝葉に走るものと謂ふべきのみと論ぜられたが⁽¹⁰⁾、併し概念構成は心理的基礎によるべきものに非ずして、論理的根據に俟つべきものなりとは近時の認識論家の等しく唱へる所であり、且つ學徒の普く認むる所である。企業に於て利潤獲得の事實こそ却つて結果として外面に現はれる所のものであるまいか。果して然りとせば、坂西氏の企業の定義は未だ全部の眞理を傳へるものでないと言はざるを得ぬ。是に於て企業の本質を危険負擔の裡に見んとする Liefmann の見解は、吾等の注目を大いに牽くのである。

(9) *Unternehmung* (獨); *Enterprise* (佛); *Undertaking or enterprise* (英)。

(10) 坂西氏、前掲書、第二十四頁。

Liefmann は企業の本質を危険負擔に存すると説くが、併し單にそれのみでは小農の危険と大地主の危険、また小店舗を有する手工業者の負擔する危険と大工業家の負擔する危険とは全然同一で、唯だ程度の差あるに止まるといふことになるから、企業の特徴としては更に別個の新觀點を附加へねばならぬとして、資本計算 *Kapitalrechnung* を行ふこと、詳言すれば營利活動に於て一定の金額たる資本を基礎とすることを擧げて居る⁽¹¹⁾。即ち Liefmann の所謂危険とは貸借對照表の面に表はされる所の資本の危険であつて、之を更に適確に言ひ現はせば利潤の危険である。されば企業の負擔

する危険は、營利の目的たる利潤全部に關する危険であると言ひ得るのである⁽²⁾。Liefmann は他の著に於て収益能力 Rentabilität なる文字を用ひて企業の特徴を示して居るが⁽¹³⁾、収益能力とは蓋し損益勘定の貸方より借方を控除したる残高、即ち利潤を斥すものに外ならぬ。關博士が『企業の本觀念は収益能力に在りて、収益能力に關する危険を踏むは企業者の手工業者又は勞働者と區別せらるゝ所以なり』⁽¹⁴⁾と論ぜられたのは此の意味である。

- (11) Liefmann, Unternehmungsformen. 2A. 1921. S. 19.

増地商學士譯『企業形態論』第十頁。

- (12) 福田博士著『國民經濟講話』第十七章企業の意義及任務參照。

- (13) Liefmann 曰く、Der Rentabilitätsgedanke ist meines Erachtens in letzter Linie das Charakteristikum der Unternehmung.—Beteiligungs-u. Finanzierungs-gesellschaft. 1909. S. 21.

- (14) 關博士稿『經營と企業との意義に就て』(國民經濟雜誌第九卷第四號)。

凡そ利潤は學者の名づけて殘高所得と云ふものに屬し、契約所得たる利子・賃銀・地代と著しく其の性質を異にする。従つて利子・賃銀・地代として支拂はるゝ所大なる場合には利潤は小に、其の反對なる場合には利潤は大である。是れ即ち利潤危険の特殊なる性質を帶ぶる所以であつて、之を負擔するのが企業の本質である。福田博士は、企業を定義して次の如くせられた。曰く『企業と

は流通經濟に於て、各種の流通行為により、生産及營利に要する物と人とを、己れの創意と責任とに於て買ひ入れ、借り入れ、又雇入れて、費したるものより以上の貨幣價值を作り出すを目的とする經濟を云ふ。^{〔15〕} 又曰く、『企業とは商品生産に於て生産發動の根源たるものにして、受動の要素たる土地及び資本と實行の要素たる勞働とを、自己の創意と責任の下に結合して貨殖を圖る經濟單位を云ふ^{〔16〕}』と。

(15) 福田博士、前掲書、別冊版第五二一頁。

(16) 福田博士著『經濟原論教科書』（經濟學全集第一集第一三〇三—四頁）。

右の定義の中に使用せられたる自己の創意と責任なる概念を危險負擔の意味に解すれば、福田博士の説は企業の本質を説明したるものとして殆ど間然するところ無きものと謂ふべきである。茲に試みとしての余の定義を掲ぐることに許されるならば、余は次の如く云はうと思ふ。『企業とは市場生産（又は商品生産）に於て利潤危險を負擔する持續的營利經濟を云ふ。』知らず、此の定義に賛同する者幾人ありや。

企業の本質を見究めるに際し尙特に注意を要することがある。それは既に吾國の先覺學者の間にも論争を重ねられたことのある企業と經營との概念の異同に就てである。此の問題を最初に提出せられたのは關博士であつて、關博士は『經營と企業との意義に就て』従來の學說を具さに比較討論せられた後、經營は生産の組織なり、企業は營利の組織なりとの斷定を下されたのである。之に對し上田博士は『企業及經營の意義に關する疑問』として、右の關博士の所說が畢竟するに従來福田博士等の採用する通說、即ち財を獲得する爲めの組織を技術上より見て經營と名づけ、經濟上から見て企業と名づけるといふ說と同じ事を別の方面から見て事實上同じ判斷に歸着したのであらうとせられた。又坂西氏は『企業と經營』に於て、關博士の批評せられたる Sombart の經營及び經濟に關する說を再び吟味する所あり、氏の立場を述べて左の如き一表を示された。

一、目的を定むる所の組織——經濟

(一) 獲得・充用の兩目的を包含する經濟

(二) 充用の爲めのみの經濟(例へば家計)

(三) 獲得の爲めのみの經濟

甲、營利經濟(例へば企業)

乙、其他の獲得の爲めの經濟

二、目的を遂行するの手段〓經濟行爲

(一) 組織なき個々の獲得又は充用行爲

(二) 統一的に組織せられたる獲得又は充用行爲〓經營

然るに福田博士は右三氏の所説の分れるのは、懸かつて Sombart の解釋に在りとせられ、抑も Sombart の企業の意義は彼に限り通用すべき一の作爲概念 Kunstbegriff なるが故に、彼の説の由つて起る所以を知る必要あり、之が爲めには『Sombart より Marx へ』⁽⁴⁾の觀察の方面を轉ぜねばならぬと論ぜられた。

- (1) 國民經濟雜誌第九卷第四號關博士論文參照。
- (2) 同誌第九卷第五號上田博士論文參照。
- (3) 同誌第十卷第一號坂西氏論文參照。
- (4) 同誌第十卷第三號福田博士論文(經濟學全集第四集收載)參照。

余の見る所では、企業は經濟上の組織であり、經營は技術上の組織であるといふ通説が最も妥當であるやうに考へられる。

蓋し Sombart が『經營は勞働團體であり、經濟は價值増進團體である』⁽⁵⁾と明言したのは、彼自

ら暗示する如く Marx の『資本論』第一卷第三篇第五章に於ける『勞働行程と價值増進行程』⁽⁶⁾に着想を獲たものであつて、此の『勞働行程上の』と謂ひ『價值増進行程上の』と謂ふことを、平凡なる言語に引直したものが『技術上の』また『經濟上の』といふことに外ならぬと見られるからである⁽⁷⁾。加之、最近の學者は概ね企業を經濟上の組織と見、經營を技術上の組織と見るに於て一致せる見解を示して居るのである。

(5) „Betrieb ist Arbeitsgemeinschaft; Wirtschaft ist Verwertungsgemeinschaft.“—Sombart, a. a. O. S. 5.

(6) Marx, Das Kapital. Bd. I, 7A. 1909. Kapitel 5. Arbeitsprozess und Verwertungsprozess. S. 139.

高島素之氏譯『資本論』改譯第一卷第二〇一頁以下。

高島氏の譯には價值増進行程とある。

(7) 福田博士著『續經濟學講義』(經濟學全集第一集收載)第四章貨幣價值と企業參照。

例へば Liefmann は曰う。

『經營とは經濟的活動の爲めの外部の設備並びに施設と指導者並びに執行者そのもの、經濟的活動とを包括したるものを謂ふ。即ち开は經濟によつて包含せられる技術的活動を指示するところの技術上の概念である。従つて此の概念が何よりも經濟的活動の明瞭なる特徴としての勞働の場所及び勞働時間に關聯するのは謂ふまでもない。されば經營なる概念は之を今日少

くとも庖廚が猶一個の經營を示す場合の如く家内經濟の上にも適用し得るのであるが、併し其の主要なる意味を有するのは獨立の營利經濟に對してである。賃銀労働者や使用人は何等經營を有せずして、他人の經營に在つて勞働する。又自宅に在つて顧客の爲めに裁縫を爲す仕立女の裁縫具の如き、同じく顧客の爲めに寫字を爲す筆工の寫字用机やタイプライターの如きも之を經營とは名付けられぬ。農業に於ては營利經濟的經營と家内經濟とが未だ密接なる關係を有する。小工業並びに小商業に於ても或程度までは同様であるが、唯だ小商業の場合には倉庫、而して小工業の場合には仕事場が特殊經營の特徴である。然るに企業に在つては、經營は所有者の家内經濟と完全に分離せられ、吾人が企業の特徴と認めた所の特殊なる資本計算の基礎である。然るにまた甚だ多くの經營が一の企業に統一せられるといふこともある。何となれば經營は、場所統一的生産行程の技術的特徴により決定せられる技術上の單位だからである。斯くて異なる場所に於ける同種の經營が一の企業に統一せられ得ること、例へば商業上の支店の如きものあり、又時間的に繼續する生産活動及び營利活動が同一の企業に統一せられ得ること、例へば工業に於て原料供給の經營と加工の經營即ち紡績・織布・染色・光澤出し等が各特殊の經營を爲し、大商業に於て倉出し・發送・記帳等が各特殊の經營を爲す如きものが存するのである。』⁽⁸⁾

(8) Liefmann, Unternehmungsformen. SS. 28—29.

増地氏譯書第二三—二四頁。但し今譯書に従はず。

また Amonn も曰う。

『國民經濟なる像 Bild は之を仔細に觀察するときは、國民經濟の過程に間斷無く流入し又は其の中に維持せられるところの生産手段が、等量に若しくは無規則的に分配せられるのではなくて、換言すれば常に同様の濃度に於て若しくは同様の結果に於て現象の上に（或は中に）現はれるのではなくて、夫自身また相對的に獨立の單位を形成し且つ斯かるものとして現實に存するところの全然異種の結合に於て現はれるものであることを吾等に示す。而も其の現はれるのは二つの根本的に相異なる種類の結合である。即ち一は一定の財——麵麩・砂糖・靴・衣服等——の生産の技術的目的によつて制約せられるものであり、他は一定の計算的に表示せられたる「収益」の追及てふ「經濟上の」目的によつて制約せられるものである。「収益」とは其の場合使用せられざる生産手段の「價值」に對する「生産物」の「價值」又は「利用」の「餘剩」であつて、「生産手段」の所有者に「所得」として分配せられるところのものである。さて上の生産手段の結合の第一のものを、一定の財の生産の技術上の目的といふ見地より一の單位を爲すと見て吾等は之を「經營」と呼び、ま

た第二のものを、抽象的に所得に還元せられる「價值收益」の追及といふ見地より一の單位を爲す
と見て吾等は之を「企業」と名付ける。「砂糖工場」・「靴工場」・「鑛山」・「店舗」等は經營であり、
株式會社は企業である。經營は土地・場所・建物並びに器具・機械・勞働力等の技術的關係に於て
言表はされ、企業は「營業帳簿」に見はれるやうな生産手段の價值の計算的關係に於て言表はされ
る。』⁽⁹⁾

(9) Amann, Grundzüge der Volkswohlslandslehre. I, SS. 46—47.

四

以上余は企業の本質を考へ之に關聯して企業と經營との異同を辯じた。次に何人が企業者なりや
に就き少しく述べやうと思ふ。

凡そ企業の危險を負擔する者を名付けて企業者といふのであるが、企業者たるが爲めに竭さねば
ならぬ職能に三つある。即ち

一、貨物の生産に必要な生産要素に對する處分權を自らの手に統一すること（此の場合生産が
問題でなく利潤を獲得せんが爲めの賣買が問題なるときは、彼が現在又は將來他人に欲望充足

の爲め提供するところの財に對する處分權を自らの手に集中すること。

二、一定の生産の目的を達せんが爲めに上の生産要素に命令を與へ、従つてまた之を處分すること（利潤を獲得せんが爲めの賣買に於ては彼が之を一定の時に市場より買入れ或は市場に賣出すこと）。

三、此等の事を爲すに自らの計算と危険とを以てすること。

是れである。而して此の三職能は Brentano が其の『企業者論』⁽¹⁾に於て掲ぐる所であるが、Sombart も亦企業者の職能として次の三を擧げて居る。

一、組織者たること (organisatorische)

二、商人たること (handlerische)

三、計算的世帯主たること (rechnerisch-haushälterische)⁽²⁾

Brentano の言ふ所も Sombart の述べる所も畢竟軌を一にするものと見ることが出来る。

(1) Brentano, Der Unternehmer. (Volkswirtschaftliche Zeitfrage, Heft 225.) 1907. S. 16.

(2) Sombart, a. a. O., 2A. 1916. u. 4A. 1921. SS. 322—324.

Sombart は右書の第一版（一九〇二年、第一九七一—一九九頁）に於ては、企業者の活動として指揮的・組織的なること (disponierend-organisierende)、計算的・投機的なること (kalkulatorisch-spekulative)、合理的なること (rationalistische)

の三つを擧げて居つたが、第二版以後に於て聊か説明の仕方を変へた。福田博士の『國民經濟講話』第十七章中に引用せられた Sombart は第一版に據られたものである。

然るに茲に企業者を定めるに際し少しく問題となるものが二つある。一は株式會社に於ける重役は企業者なりや否やの問題であり、他は勞働者は企業者なりや否やの問題である。以下此の問題につき若干考察を加へて見やう。

先づ第一の問題から始めんに、由來株式會社に於ける企業者は何人なりやといふことは學者の間に異論の生じた所である。株式制度の未だ發達せざる時代に於ては企業者は出資者たると同時に經營者たるを常とした。即ち個人企業に在つては勿論、合名會社・合資會社についても唯だ一人の主人が數人となつたといふ差異が見られるのみで、經濟上より觀察するときは企業者の職能は個人企業の場合と同様である。然るに株式會社に於ては資本を醸出して有限責任を負擔する普通の株主と、事業經營の一切に當る重役とがある。是に於てか株主が企業者であるか、重役が企業者であるかといふ問題を發生するに至つたのである。獨逸に於ては注律上の形式に基き株式會社の企業者は株主である。株主が會社の事業に冷淡なるは未だ自己の地位を自覺せざるが爲めであるとして益々株主の權力を強めようと主張する者がある。此の論者は株式が利子券に非ずして利潤券なる所以を

説き、以て株式を所有する株主は企業の危険を負擔する企業者であると説くのである。それ故此の論者から見れば重役は一個の使用人に過ぎざるものとなり、到底企業者とは呼び得ぬ。Liefmann, Brentano の如きは此種の論者である、例へば Liefmann は明言すらく、『或は企業の指揮を以て企業者の根本義と爲し、株式會社に於ける企業者は重役であると見る者もあるが、併し之は全く經濟上の見解と爲し得ぬ。若し此の見解にして正しとせば、國家の計算と危険とを以て敷設經營せられる鐵道の企業者は鐵道大臣であつて國家ではないといふことになる。寧ろ株式會社に於ける企業者は費用と危険とを負擔する者即ち株主と爲すに如くは莫い』⁽³⁾と。

(3) Liefmann, a. a. O. S. 52. 増地氏邦譯第五三頁。

之に反し Ehrenberg や Knight の如きは、株主は單純なる出資者であり債權者であつて企業者ではないと説く。更に又 Passow の如きは右の兩説を折衷して大株主は企業者であるが、小株主は單純なる出資者であると唱へる⁽⁴⁾。

(4) 上田博士著『株式會社經濟論』(大正十年改訂増補版、第一〇二頁) 參照。
Knight, Risk, Uncertainty and Profit, 1921, p. 359.

茲に上田博士は以上の如き説は皆囚はれたる説であつて、株式會社の無い時代の企業者の觀念を

無理に株式會社に當て嵌めんと試み、株式會社が企業者の職分の分擔を惹起したる事を看過せる議論であるとせられ、此の問題に對する解答を次の如く示された。曰く『株式會社にありては最早舊來の意義に於ける企業者なるものなし。企業者の職分は株式會社と稱する一個の組織に依りて行はる。而して其の組織の内部にありて職分の分擔が行はれ、出資者として事業の危険を負擔する職分は株主に行き、事業を經營指揮する職分は重役に割宛てらる。説明の便宜の爲めに假に命名せば、重役は勤勞企業者 *arbeitender Unternehmer* にして、一般株主は不勤勞企業者 *nicht arbeitender Unternehmer* とするも不可なし。但し此に二種の企業者が發生したるに非ずして二者一體を爲して一の目的を達するなり』⁽⁵⁾と。

(5) 上田博士著、前掲書、第一〇三頁。

此の上田博士の所説と大體に於て趣を等しうするものに最近 Dobb がある。Dobb は株主就中大株主を資本家的企業者 *capitalist undertaker* と名付け、他方一定の報酬を得て企業者の任務を竭す者即ち重役の或者を俸給企業者 *salaried undertaker or undertaking associates* と呼び、共に企業者の取扱を爲して居るのである⁽⁶⁾。

(6) Dobb, *Capitalist Enterprise and Social Progress*. 1925. S. 54.

然るに福田博士は、右の上田博士等の解答を以て其他の諸説と共に肝要の點を逸し枝葉の點を論ずるものとせられ、別に前人未發の新説を樹てられた。福田博士に従へば、株式會社といふ形態より言うて企業者は株式會社そのものである。何となれば株式會社は法律上の形式より見れば法人たる資格を取得し、同時に經濟上の實質より言うも一の經濟人格であり一の經濟單位たるを失はぬ。

株式會社は株式會社として一般公衆に對抗し得る。其の以外に株式會社の企業者を求むる必要は毫も存せぬといふのである。斯くて福田博士は多くの學者が此の點に注意せざる原因を以て、企業者は必ず自然人、換言すれば骨肉を備へたる生ける人間なるを要すとの考に基くものであらうと想定せられる。されば福田博士は特に今日の經濟生活に於ける非人化・非生物化の形勢の著大なるを指摘せられ、株式會社の發生するに至つて自然人に非ざる法人が、企業者として動かすべからざる、而も最も進歩せる、最も活動力に富める企業形態となるに至つた所以を力説せられるのである。

(7) 福田博士著『國民經濟講話』第三十七章參照。

余惟うに、福田博士の論は爾餘の諸説の綜合的立場を代表するものとして頗る斬新卓拔である。併しながら此の論は法律上の形式を藉り來つて經濟上の實質を規定せんとする慊無きかを疑はざるを得ぬ。上田博士並びに Dobb の如く重役・株主共に企業者の職能を分擔するものであると解する

の穩當なるを覺ゆるのである。

五

次に勞働者は企業者なりや否やの問題の檢覈に移らう。勞働者は企業者なりやとは言既に *contra-dictio in adiecto* の如く聞ゆるが、併し Brentano の如き有力なる學者が既に之を問題とし、而も肯定的解答を與ふる以上、余も亦之が解釋を試みねばならぬ。Brentano の論據とする所は、土地又は流動資本の利用を獨立の財として賣る企業の存する如く、勞働力の利用を獨立の財として市場に賣す企業者も亦存する。今日の個人自由に基く經濟組織に於ては其の勞働行爲を雇主に賣る勞働者は即ち企業者であると云うに在る⁽¹⁾。

(1) Brentano, a. a. O. S. 19.

而して之が理解を容易ならしめんが爲めに、Brentano は次の如き説明を用ひる。今日の經濟組織の下に於ては生産せられる貨物は、其の生産に従事せる勞働者の貨物ではなくて企業者の貨物である。蓋し企業者の認識と意慾とにより勞働者の勞働行爲は他の生産要素と共に新なる生産物に結合せられるからである。嘗て Goethe が Hermann und Dorothea の原稿を Cotta に送つた時、Cotta

は Goethe に其の要求額壹千フロリンを與へたことがある。而して Cotta は此の原稿を印刷して Goethe の著 Hermann und Dorothea を市場に出したのである。此の場合出來上つた書物は Goethe の所産でもなく、また其の戯曲を印刷に附した印刷者の所産でもなく、況んや其の印刷せられた紙の製造家の所産でもない。市場に出た書物は實は Cotta の所産である。然らば Goethe は何等生産者でなかつたかと言へば決してさうではない。彼は明かに生産者である。假令出來上つた書物の生産者でなくとも其の最も主要なる部分、即ち印刷せられたる戯曲の生産者である。同様に印刷者は勞働行爲の生産者、紙製造家は紙の生産者である。此の兩人の生産部分が Cotta により Goethe の生産部分と結合せられて書物と成つたのである。されば勞働者は消費せられるべき貨物の生産者に非ずとは云へ、尙且つ自らの計算と危険とを以て市場に齎すところの獨立の財の生産者たるを失はぬ。此の意味に於て勞働者も亦勞働行爲の企業者であると説くのである⁽²⁾。

(2) Brentano, a. a. O., SS. 25—26.

併しながら翻つて考ふるに、勞働者の脅されるところの危険と企業者のそれとは全然性質を異にするものである。Brentano の例に於て Cotta の受くる利潤は既に述べたる如く殘高所得であるに反し、印刷者の受くる賃銀は契約所得である。Brentano の如く勞働者も亦企業者であるとの説は、餘

びに解釋を擴張し過ぐるものであつて却つて混淆を來す、余は Liefmann と共に⁽³⁾ 勞働者は企業者に非ずと斷定して憚らざるものである。

(3) Liefmann, a. a. O. S. 22.